

лопух とは何か—北方植物名彙考 1—

中川裕

I. はじめに

私は、1998年度の千葉大学文学研究科（修士課程）の「北方言語論」と、社会文化科学研究科（博士課程）の「日本基層文化論」という授業を使って、（少なくとも私自身にとって）実験的な演習を試みた。それは、現地調査によって言語の記述を行う際に、記述対象となる語の指し示す「もの」を素通りして、単語から単語への置き換えを行うような結果になることをなるべく避けるために、「もの」自体についての知識をあらかじめ身につけようという試みである。今回は特に、それを北海道、サハリンからシベリアにかけての、つまり日本の北方の食用植物に限定して行った。

私もふくめ、ユーラシア学会に所属する教官・学生には現地で語彙調査を行うものが多いが、その際に常に問題として立ちはだかるのが「もの」に関する知識である。一般に言語学の環境で教育を受けたものは、言葉を文法とか音韻とかという側面で捕らえることには習熟しているが、それが外界の何を指しているかの記述には、知識・技術を持っていないことが多い。しかし、語彙調査を行う場合、あるいは辞書などを作ろうと企てた場合には、言語外的な知識が不可欠になる。

植物に関して言えば、媒介言語（日本語、ロシア語等）で話者が想起したものを現地語で答えてもらうという方式、図・写真を見せて答えてもらう方式、実物を指し示して答えてもらう方式などがあり得るが、そのどれもが、そこで名前を問うている植物そのものについての知識が不足していれば、誤った情報を持ち帰ってしまう可能性がある。

また、媒介言語を利用する際の問題として、一般の語学用の辞書に書いてあることは、おおよそ「標準語」における用法の記述であり、実際に我々が調査する地点で話されている言葉の用法とは異なる可能性が常にある。したがって、媒介言語の辞書の記述をそのまま引き写すのは、危険な行為である。また、文献による情報の信頼度は、その記述者がどれだけ植物に関しての知識があったかということに、当然左右される等ということが挙げられる。

現地調査を行っている人間は、そうした問題にぶつかりながら、個々の努力で何とか植物名を同定しているわけだが、日本北方の植生は、地域によってそう甚だしく違っているわけではなく、土地の住民が利用している植物には共通するものが多い（はずである）。したがって、そうした地域を研究する者同士がお互いに情報を交換し合うことによって、必要な労力はおおいに軽減されるはずである。そうしたことを目的に、この授業を展開してみた。実際には、おもに北方の諸言語のフ

フィールドワークを行っている院生と、中国からの留学生を中心に、それぞれがもともと抱えているテーマ、あるいは新たに見つけてきたテーマについて発表をしてもらおう形で進めたが、思い掛けない面白い問題が出てきて、いくつかはその疑問の解決を見た。それについては、個々の受講生がいずれ発表の場を見つけて論じることと思うので、ここでは私自身がこの授業を通じて結論にいたったある問題について紹介することにしたい。

II. Кто вы айны の лопух

私に取り上げたのは日本北方の諸地域に関する文献中に登場する лопух という植物名である。この語は現行の露和辞典ではおおよそ「ゴボウ」と訳されている。

「лопух, -хá 男3 1 [集合]でも [植]ゴボウ (репейник) (キク科、ロシアでは荒地や道ばたの雑草; ある種のゴボウの根は利尿・発汗剤); ゴボウの葉」研究社露和辞典、初版、1988

「лопух, -á А1 男1 [植]ゴボウ; その大きな葉」岩波ロシア語辞典、新版、1992

「лопух, -á ① ((植))ごぼう様の雑草; やはずあざみ ②その葉」三省堂コンサイス露和辞典、第4版、1983

この語は、Ч.М.タクサミ、В.Д.コーサレフの Кто вы айны (熊野谷葉子訳『アイヌ民族の文化と歴史』1998、明石書店)にも登場する。

Кроме ягод, орехов, иных плодов туземцы в больших количествах заготавливали клубни лилейных, коренья, травы, папоротник, черемшу, грибы, побеги лопуха, бамбука, стебли пучки и многое другое. (Ч.М.Таксами и В.Д.Косарев, Кто вы айны?, 1990, Москва, p.182)

この文章を直訳すれば「漿果類やクルミなどの実の他にも、住民たちは、ユリ科の植物の球根や、根菜、草、ワラビ、ギョウジャニンニク、キノコ、лопух の若枝 (あるいは若芽)、タケノコ、пучка の茎、その他いろいろなものを大量に貯えていた」となる。

最後に出てくる пучка という語は、一般の露和辞典には採録されていない語で、どういう植物を指すものであるか不明である。そこで訳者の熊野谷氏が、著者のひとりであるタクサミ氏に直接問いただした結果、フキのことを指しているのだらうということになった。

一方 *лопух* であるが、この邦訳版の監修を引き受けていた私は、この語の訳に関して自分の見解を差し挟んだ。知里真志保『分類アイヌ語辞典 植物篇』（1953、日本常民文化研究所：『知里真志保著作集』別巻Ⅰ所収、1976、平凡社）には、ゴボウについて次のように記されている。

§ 12. ゴボオ (牛蒡) *Arctium Lappa L.*

- (1) *seta-korkoni* (*se-tá-kor-ko-ni*) 「セたコルコニ」 [*seta* (犬) *korkoni* (蒚)] 葉柄 ((幌別))
- (2) *sita-korkoni* (*si-tá- . . .*) 「シたコルコニ」 [*seta* (犬) *korkoni* (蒚)] 葉柄 ((様似、足寄、芽室、屈斜路、美幌))
- (3) *seta-kina* (*se-tá-ki-na*) 「セたキナ」 [犬・草] 葉柄 ((白浦))
- (4) *ipakokarip* (*i-pá-ko-ka-rip*) 「イぱコカリッ」 [*i* (我らの) *pa* (頭) *ko* (に) *kari* (からみつ) *p* (もの)] 果実 ((美幌、屈斜路))

(参考) 葉を「シと」 (*sitó* しとぎ 菜) に搗きまぜて食べ、根も汁の実にした。葉をまたもんで傷口につけ或いわ腫物の膿を吸い出すのにまた用いた (幌別)。

果実は多量に採集して「プ」 (*pu* 倉) の下の地面にまき散らし、また「ぶケマ」 (*pú-kema* 倉・脚) に結びつけておくと、鼠が恐れて近ずかぬとゆう (美幌、足寄)。

この果実は体に着くと離れぬので、熊もそれを見れば恐れて近ずかぬ。それで、山中の川端に建てて凍鮭を貯えておく「にプ」 (*ní-pu* 「木・倉」) の下にわ必ずこれを大量にまいて野獣の襲撃を防いだ (美幌)。

この果実は誰の体にも遠慮なく付着するので、人間でも無遠慮な者のことを「イぱコカリッ ネナン」 (牛蒡の実の様だ) とゆう (屈斜路)。

この記述からは、たしかにアイヌ人もゴボウを利用していたことが知られるものの、食用植物として、ギョウジャニンニクやユリ科の植物の球根と肩を並べて論じられるような重要なものであるとは感じられない。第一に、*seta*-「犬の」という形容がなされる植物名は、*seta-pukusa* 「スズラン；*pukusa* ギョウジャニンニク」とか、*seta-munciro* 「エノコログサ；*munciro* アワ」とか、*seta-amam* 「イヌビエ；*amam* 穀物」とか、似ているが役に立たないものに対してつけるのが普通である。したがって、*лопух* はゴボウに似ているが、何かアイヌ人の生活にとってもっと大きな役割を果たしているものを指していると考えた方がよさそうである。

この *лопух* についても訳者から著者に問い合わせてもらったが、著者からははっきりとした返事が返ってこなかった。そこで、著者がこの部分で挙げている参考文献を検討することにした。そのひとつである H. Watanabe, *The Ainu Ecosystem* (1972, Univ. of Tokyo Press) の該当箇所 (pp.38-39) に

は、アイヌの Food Plants の一覧表が掲げられている。そこには、young stalks を利用する植物として korokoni (フキ)、ukurukina (タチギボウシ)、pui (エゾノリュウキンカ) の三つが挙げられており (アイヌ語の表記は原文のまま)、ゴボウは表中にない。пучка がフキのことだということであれば、残りのふたつの中でゴボウに比定できそうなものは、大きさは全然違うが葉の形が似ており、その細長い根をも利用するエゾノリュウキンカであろうと考えた。そこで、私は「エゾノリュウキンカ」を лопух の訳語として訳者に進言したのである。しかし、同書の刊行後この授業で再び検討を加えるうちに、この判断は不的確であった可能性が高いと考えるようになった。

III. サハリンの лопух

лопух は、サハリンに関する古典的な文献にも度々登場する。ニヴフ人の言葉と生活を描いた、E.A. クレイノヴィチの *Нивхгу* もそのひとつである。

Мру—растение, Его кладут в котел, наливают немного воды, прикрывают листьями лопуха (либо подходящей посудой из бересты) и варят на небольшом огне.

(E.A.Крейнович, *Нивхгу*, 1973, Москва, p.133)

「ムルウー植物。鍋に少し水を注ぎ、ゴボウの葉 (または適当なシラカバ表皮の容器) で蓋をして弱火で煮る」 (榎本哲訳『サハリン・アムール民族誌』1993、法政大学出版局、p.104)

また有名な A.П.チェホフの *Остров Сахалин* には、次のような一節がある。

гигантские папоротники и лопухи, листья которых имеют более аршина в диаметре, вместе с кустарниками и деревьями сливаются в густую непроницаемую чашу, дающую приют медведям, соболям и оленям. ... Таких громадных лопухов, как здесь, я не встречал нигде в России, и они-то главным образом придают здешней чаше, лесным полянам и лугам оригинальную физиономию.

(A.П.Чехов, *Остров Сахалин*, 1895 ; Полное Собрание Сочинений и Писем тт. 14-15, 1978, Москва, p.118)

「巨人のやうな羊歯類や、直径 1 アルシン以上もある葉をつけた生蕒は、こんもりした、通行も出来ないやうな茂みをなし、灌木や雑木と混り合って、熊や、黒貂や、鹿に隠れ家を與へて

ある・・・このやうに大きな生莖は、わたしはロシアちゅうどこでもつひぞ見かけたことがなく、これが、特に、この茂みや、林間の空地や、草原に、獨特の風貌を添へてゐるのである」(中村融訳『サハリン島』1953、岩波文庫版、p.149)

1 アルシンは約 70cm。それだけの大きさの葉を持つ植物ということになれば、これはエゾノリュウキンカではありえない。しかし、ゴボウについて書かれた文献からも、葉の大きさがそこまですくなるという記述は見出せない。これまで私の見た範囲では、40cm というのがゴボウの葉について書かれた最大の大きさである。たとえば、奥山春季編(1977)『寺崎日本植物図譜』(平凡社)には次のようにある。

ゴボウ *Arctium lappa* L. キク科の越年草。食用のため畑地に栽培される。茎は高さ 1.5 メートルに達し、上方で枝分かれする。根生葉は叢生し大形で長さ 40cm、長い柄がある。(p.836)

葉の大きさという点からすれば、ゴボウよりも蓋然性の高い植物が存在する。それはフキ、特にアキタブキである。『朝日百科 植物の世界』(1997、朝日新聞)には、フキについて次のように書かれている。

フキは日本では 9~10 世紀の『新撰字鏡』や『延喜式』『本草和名』などに記載があり、ウド、ミツバ、セリとともに数少ない日本原産の野菜である。【中略】フキ属は北半球に約 20 種がある。フキ *Petasites japonicus* は、北海道から沖縄までと、朝鮮半島、中国に自生する。葉は腎心形をした葉身と、葉柄(食用部分)からなる根生葉で、幅は 15~50 センチ。多年生で、地下に横走する根茎でふえる。

アキタブキ *P. japonicus* ssp. *giganteus* は、関東北部の標高の高い栃木県那須郡あたりを南限に、東北から北海道、千島列島、サハリンに自生する。秋田県では(アキタオオブキ)が栽培され、いずれも大型のフキで、葉柄は長さ 2 メートル、葉の直径は 1 メートルにもなる(第 1 巻 pp.162-164)

ロシアで出版された植物百科とでもいうべき *Жизнь растений* という書物においても、キク科植物のセクションで次のような記述がなされている。

Величина, форма и степень расчленения листовой пластинки сильно варьируют, от очень

крупных, как у белокопытника японского (*Petasites japonicus*), произрастающего на Сахалине, Курильских островах и в Японии (пластинка его цельного прикорневого почковидного листа достигает в поперечнике 1.5 м. а черешок в длину 2 м), до маленьких, очень редуцированных, как у американского бакхарица безлистного (*Baccharis aphylla*) с прутьевидными фотосинтезирующими стеблями. (*Жизнь растений*, 5(2), 1981, Москва, pp.163-164)

「【キク科の植物の葉の】大きさ、形状、葉身の分裂の程度ははなはだしく差がある。サハリン、クリル諸島、日本に分布する日本のフキ(*Petasites japonicus*) (根の近くにある腎臓形の葉の完全な葉身は、直径 1.5 メートル、葉柄の長さ 2 メートルに達する) のように非常に大きなものから、葉を持たず、光合成する細枝状の茎を持つ、非常に退化したアメリカ産のバッカリス(*Baccharis aphylla*) のような小さなものまでである。」

フキもゴボウも同じキク科の植物であるが、同書において葉が大きいことについての言及があるのはやはりフキであり、ゴボウに関しては根についての言及はあっても、葉に関しては特筆されていない。また、ゴボウの葉はフキよりも細長い形はたしかに似ている。だからこそ、アイヌ語でゴボウのことを *seta-korkoni* 「犬のフキ」などと呼んでいるのである。したがって、チェホフが巨大な *лопух* と考えたものは、アキタブキだったと考えると大きさについての疑問が解消される。

また、仮に他の文献に現れる *лопух* もみな同じ植物を指していたと考えた場合、ゴボウとフキではどちらが蓋然性が高いだろうか？ *Кто вы айны* の *побеги лопуха* については、フキノトウを指しているのだと考えれば、わざわざ「若い芽」と限定していることの説明がつくし、ゴボウよりフキの方がアイヌの食生活において重要な位置を占めていたと見なすことにも問題はあるまい。フキの茎 (*стебли пучки*) が別名で挙げられていることについては、フキノトウとフキの葉柄との形状の違いから説明できる。アイヌ語でもフキノトウ (*makayo*) とフキの葉 (*korkoni*) は全く別の語で表される。クレイノヴィチが鍋の蓋がわりに使うと記述したものについても、知里『分類アイヌ語辞典植物篇』に「フキの葉わ、物を拭ったり、包んだり、栓にしたり、鍋にしたり、極めて広い用途を持っていた。フキの葉の鍋を『コルス』*kór-su* と云い、それを作ることわ、山狩などに行く者にわ必須の心得であった」とあり、ニヴフにおいても同様の利用法がとられていた可能性は十分にあるだろう。つまり、これらの *лопух* がすべて同一の植物であると考えた場合、それはゴボウではなくアキタブキであった可能性の方が高いということになる。

さらに、ゴボウについては『朝日百科』に次のように記されている。

ゴボウを食べるのは、日本と朝鮮半島だけのようである。中国でも、現在は薬用にするだけである。欧米の人たちは、日本人がゴボウを食べるといっても、なかなか信じない。ヨーロッパでは牧草地の雑草だし、北アメリカにも帰化してはびこっている。だからいくら説明しても、雑草を食べるのかと半信半疑なのである。

【中略】

ゴボウ *Arctium Lappa* はヨーロッパからアジアにかけて分布する。【中略】ヨーロッパでは牧草地や道端の雑草で、とくにポーランドなど東ヨーロッパに多い。北アメリカやオーストラリア、ニュージーランドなどに帰化し、ところによっては雑草として猛威をふるっている。

(第1巻、pp.25-26)

このように、特に東ヨーロッパでは、ゴボウはごく普通に見られる雑草のようである。また、*Жизнь растений* では *лопух* について次のように記されており、薬草としても古くから親しまれていたことが知られる。

Род *лопух* (*Arctium*) насчитывает примерно 8 типично двулетних видов. Это обычные рудеральные и сорные растения. Вместе с тем *лопухи* — медоносы, а их корни — старинное лекарственное средство. Особенно известен настой корней *лопуха* на миндальном или оливковом масле, так называемое репейное масло. (*Жизнь растений*, 5(2), p.475)

「ゴボウ属 (*Arctium*)はおよそ8種の典型的な二年草からなる。これらは通常荒地に生える雑草である。これは蜜を分泌する植物であり、その根は昔から薬として使われる。特にゴボウの根をアーモンド油やオリーブ油に浸してエキスを抽出したものは有名であり、『ゴボウ油』と呼ばれている」

一方フキは、前述の『朝日百科』の記述にあるように、少なくとも日本に生えているのと同じ種のもは、ロシアを含むヨーロッパには自生していないようである（アキタブキの自生地が、アイヌ人のかつての居住範囲とぴったり一致しているというのは、偶然にしても面白い）。したがって、少なくともモスクワやペテルブルグに住んでいるロシア人にとっては、フキよりゴボウの方がなじみの深い植物であり、チェホフたちはサハリンのフキをそのゴボウの巨大なものとしてとらえたのだと推測してもよさそうに思える。

ところが、ことはそう単純に済みそうもない。19世紀半ばに編纂され、当時の民衆語彙を多数

収録した В.Даль, *Толковый словарь живого великорусского языка* (第3版、1912、С.-Петербург—Москва) には、Ло(а)пуга という項目で、まず ло(а)пұхъ, ло(а)пұхá, ло(а)пұшникъ, ло(а)пұха といった見出しのもとに растение *Arctium lappa* [или *Lappa major*] が挙げられているが、その後に Лопухá, растение *Petasites offic.* [или *Petasites vulgaris*] ともある。*Petasites* はキク科フキ属のことであり、つまり лопух にはゴボウばかりでなく、もともとフキの仲間を指す用法もあった可能性があるのである。

さらに、ロシア語の方言辞典である *Словарь русских народных говоров* (1981, Ленинград) を引くと、フキ属を指す用法ばかりでなく、*Всякое широколиственное растение, Лопуха Сиб.* 「広い葉の植物すべて。Лопуха. Сибيريا」などという記述もある。したがって、地域によっては（たとえば、タクサミ氏の故郷であるアムール川流域や、コーサレフ氏の故郷であるサハリンのロシア語では）そもそもフキとゴボウの区別などされていなかったという可能性すらあるのである。

結論として言えることは、チェホフがサハリンで見たものがアキタブキであることはおそらく間違いないが、彼がそれを巨大なゴボウだと思っていたのか、巨大なフキだと思っていたのかは判然としないということであり、また、ロシア語で書かれた文献中で лопух という語が出てきた場合、それを現行の露和辞典に従って、ただちにゴボウと訳すのは考えものだということである。一応、フキないしそれらに類する葉の大きな植物の可能性をも考慮した方がよいということになる。

しかし、ここまで考えてきてやはり情報として欠除していると思われるのは、サハリンに自生しているゴボウが実際にはどのくらいの大きさになるのか、そしてフキとゴボウを現地でどう呼び分けているのかということである。それに言及した資料を今回は見つけることができなかった。次回、現地に行った時にぜひ確かめてみたいことだと思っている。

(なかがわ ひろし・千葉大学助教授)